

「生きる意味」受け継ぐ地

冬は2層を超す雪に包まれる岩手県
の旧沢内村(現西和賀町)は「生命尊
重」の理念が息づく土地だ。太田宣承
さん(34)は、祖父で元村長・住職の祖
電さん(86)と、2003年の歴史を持つ
真宗大谷派の碧祥寺を守り、亡き父が
となり町で始めた特別養護老人ホーム
を切り盛りしている。父は、お年寄り
のいのちの傍らで「生きる意味」を見
つけた。

(谷啓之)

岩手・旧沢内村

沢内村の「生命尊重」 1960～
61年に全国に先駆け老人と乳児の
医療費を無料化。100人中7人が
死に全国平均の倍近かった乳児死
亡率を、62年にゼロにした。当時
の深沢最雄(まさお)村長は「生
命尊重こそが政治の基本。住民の
命を守るため自分の命をかける」
と宣言し、豪雪と貧困の村で多病
多死との闘いの先頭に立った。深
沢村政で教育長を務めた祖電さん
も、遺志を継ぎ、73～93年、村長
をした。沢内村は湯田町と合併し
西和賀町に。今年、「いのちの作
法―沢内『生命行政』を継ぐ者た
ち」という記録映画になった。

5軒の旅館が並ぶ湯本温泉街に
ある特別養護老人ホーム「光寿
苑」はこの春、30周年を迎えた。
職員が描いた約50人のお年寄りの
似顔絵が廊下に並ぶ。寝たきりの
人も少なくないが、「生きる意
味」に何の遜色もないという。と
を窺見し合える道場とした。職
員が老人に学ぶという関係であり

たし」というのが父・受宣さんの
残した基本理念だ。現在副院長を
務める宣承さんは「自分たちを育
て、支えてくれた人たちが最期ま
で尊敬される場所を地域につくり
たかったようです」と言う。

父の受宣さんは、11年前の5月

の夜、48歳で逝った。湖を望む道
路のガードレールに突っ込んだ乗
用車の中で、運転中に心筋梗塞を
起こして亡くなった。
宣承さんは当時、京都の大学院
に進んだばかり。仏教学の勉強を
続け、2年後に僧侶として沢内に
戻った。初めて1人で営んだ葬儀
で、自死した人の遺族に泣きなが



●太田宣承さん(左)と祖父の祖電さん。岩手県西和賀町
①街に出てもらいたい、と光寿苑のお年寄りを乗せた「雪見
そり」をひく故太田受宣さん。93年(祖電さん提供)



親子3代「最期まで尊敬される場」を地域に

ら法話をした記憶が残る。
いろいろな人が寄り合う寺の響曲
気が子どもの頃から好きだった。
しかし、父が没頭した光寿苑の仕
事は「自分には重すぎる」と思っ
ていた。光寿苑を継いだものの、
最初の3年はつらかったという。
祖電さんも「愚子を亡くした悲
しみは、乗り越えられるようなも
のではなく、そっくり受け入れる
しかなかった」とふり返る。

受宣さんは次男で、長男も小4
の時にスキース事故で亡くした。
2年ほど前まで、毎晩、本堂の周
りを20周した。歩きながら受宣さ
んに語りかけると、いつのまにか
逆に話しかけられている気になっ
た。今も悩み事があると、夢の中
で親鸞の教えを引いて励ましてく
れる。人を救おうとして救えるも
のではない、救われなければなら
ないのは自分自身だ、と――。

「亡き愚子に生かされている自分
に気づかされました」
◇ ◇
光寿苑で、宣承さんが始めた死
生観の研修会がある。入居者とそ
の家族と、職員も一緒に、「ここ
で、誰のそばで、どのような感じ
で」最期を迎えたいかを語るの
だ。初めはムツとするお年寄りも
いる。だが、死の話は、自然と今
を生きる話になっていく。泣いた
り笑ったり、本音で語り合うう
ち、「ありがと」という言葉に
変わる。

かつて父が「車いすパワー」と
呼んだ逸話がある。車いすで買い
物や散歩に出かけるお年寄りに
ある時、匿名の礼状が届いた。
「会社が倒産、自殺しようと思
本温泉に来て、ぼろげんと歩いて
いると、車いすのおばあさんが二
コニコしながら、声をかけてくれ
ました。『やあ、こんにちは。天
気が良いなあ。さようなら』と。
私は頭をまさかかき割られたよう
な衝撃を受けました。もう一度頑
張ってみます。老人ホームのみな
さん、ありがとございました」
「福祉とは弱い人を強い人が救
うことではなく、弱い立場だから
こそ芽生えなくては心臓を殺伐と
した世の中の人たちに戻していく
こと。年若いでも心の自由を失わ
ないでいると、その人を見て救わ
れていく人も多くなる。そういう
悠久無限の回転がある」。父は、
そう語っていた。

看取りを重ねるうちに、父の思
いがわかり、「人は亡くなる時に
メッセージがある」と思うように
なった。碧祥寺で若者が語り合う
会やコンサートを開く。「僕もい
つ終わるかわからない命を生きて
いる。生きるためのメッセージを
送るのが僧侶。老人ホームの仕事
もお年寄り、家族、職員が今を生き
ること。一つにつながりました」
そんな宣承さんを、祖父は「受
宣の死で人間が変わった」と言
う。「父は命をかけて『自分自身
になれ』と教えてくれた。亡くな
った時は遠い存在だったけれど、
自分なりの道を進んでいったら、
同じことをしていた。今は一緒に
歩く同志のようです」